

総説 談話分析の可能性-医療者教育研究の動向を踏まえて Discourse analysis as a potential methodological approach – Considering trends in health professions education research

今福輪太郎¹⁾
Imafuku, Rintaro¹⁾

1) 岐阜大学医学教育開発研究センター
1) Medical Education Development Center, Gifu University

Abstract

Viewed broadly, discourse analysis is the study of ways in which naturally occurring language is used between people, both in written and spoken contexts. Examining how meaning is negotiated and constructed through learning interactions is a field of enquiry with a long history in the humanities and social sciences. Discourse analysis attempts to make visible the interactional patterns which characterize discursive practice, including written and spoken texts made in problem-based learning, health communication education, interprofessional education, and simulation-based education. However, although the importance of discourse analysis approaches as analytical framework has been gradually recognized, there are still limited number of discourse-based studies in health professions education. Therefore, with a focus on research into learning interactions, this article aims to revisit the relevance of discourse analysis in medical education research and to discuss how its findings can inform medical education. Particularly, key methodological approaches to discourse analysis are outlined, including 1) Critical Discourse Analysis that focuses on the relationship between languages and social, power and ideology; 2) Ethnography of Communication and Interactional Sociolinguistics that focus on contexts and language in use; and 3) Systemic Functional Linguistics and Classroom Discourse Analysis that focus on discourse structure and function.

要旨

談話分析は、ある文脈の中で人々がどのように言語を使用しているかを研究するための枠組みとされる。人々の言語を介した「意味」の交渉とその構築過程を検証することは、人文・社会学分野においては長い歴史を持つ研究領域である。医療者教育においても、問題基盤型学習（PBL）、医療コミュニケーション教育、多職種連携教育、シミュレーション教育等での書き言葉や話し言葉を含むインタラクションの詳細な記述は、教育活動の過程を可視化し、より多面的なエビデンスの蓄積を可能にしてくれるであろう。しかしながら、医療者教育研究では、分析的枠組みとして談話分析の可能性は認識されつつも、実際にそれを適用した研究は未だ限定的である。従って、本稿は、これまでの医療者教育における談話分析研究を概観し、談話分析アプローチの有用性や可能性を再検討することを目的とする。特に、1) 社会や権力関係、イデオロギーと言語との関連性に着目した「批判的談話分析」、2) 文脈と言語使用との関連性に着目した「コミュニケーションの民族誌」や「相互行為の社会言語学」、3) 談話構造や機能に着目した「選択体系機能言語理論」や「教室談話分析」、の3つの談話分析アプローチを紹介する。

キーワード：談話分析、医療者教育研究、批判的談話分析、相互行為の社会言語学、教室談話分析

Keywords: Discourse analysis, health professions education research, critical discourse analysis, interactional sociolinguistics, classroom discourse analysis

1. 談話分析アプローチ

談話分析は、ある文脈の中で、言語が実際にどのように使われているのかを研究するための枠組みとされる。人々の意味交渉と、その構築過程において、媒介物として話し言葉や書き言葉を含めた「言語」が大きな役割を果たすが、その「言語」に着目した研究アプローチが談話分析である。談話（ディスコース）という言葉は、談話分析のアプローチの違いによっても捉え方が異なり、その定義を明確にしておく必要がある。Gee(1990) は、談話という言葉に関して、広義と狭義に分けて定義づけを行っている。ジェスチャー、視線、体の位置や服装、言葉、行為、価値観、信

条、態度、社会的アイデンティティなどを統合した生活様式や文脈に焦点が置かれた広義での「談話」を、Gee (1990) は、頭文字を大文字にした「Discourse」として表現している。一方で、会話や物語、報告、主張といったある文脈の中で使用された言語の配列(シーケンス)や特徴などに焦点が置かれた狭義での「談話」を、頭文字を小文字にした「discourse」で表現している。

表1は、Gee (1990) が定義したマクロ・ミクロレベルの軸で代表的な談話分析アプローチを整理したものである (Imafuku, Saiki, & Woodward-Kron, 2022)。マクロレベルの代表的なアプローチは、個人間のインタラクションや言語使用の観点から社会構造や権力関係について批判的に分析する「批判的談話分析」である。一方で、ミクロレベルでは、言語使用と、その談話構造や機能を詳細に分析する「選択体系機能言語学」「教室談話分析」が含まれる。マクロとミクロの中間に位置づけられるメゾレベルは、特定の文脈における参加者の言語使用の意図に着目したアプローチが分類された。本稿では、マクロ、メゾ、ミクロレベル別の談話分析アプローチを概観し、各レベルでの医療者教育における談話分析研究の動向を紹介する。

表1：代表的な談話分析アプローチ

談話分析アプローチ		視点	キーワード	代表的な研究者
マクロ ↑ ミクロ	批判的談話分析 Critical Discourse Analysis	個人間のインタラクションにおける権力関係と不均衡に関わる問題や社会階層や構造の検証を行う。その背景にある言語使用を一つのレンズとして扱う。	社会・権力関係 イデオロギー	Norman Fairclough, Michel Foucault, Teun A van Dijk
	コミュニケーションの民族誌 Ethnography of Communication/Speaking	日常生活を含む社会的文脈での言語使用に着目する。	スピーチイベント SPEAKING（頭字語）	Dell Hymes
	相互行為の社会言語学 Interactional Sociolinguistics	いっどこでなぜ誰が誰に何をどのように話すかを分析する。	コンテキスト化の合図 フレーム 談話標識	John Gumperz, Ervin Goffman, Tannen Deborah
	語用論 Pragmatics	生成された発話自体の言語的特徴よりも、使用背景の解釈に重きを置く。	協調の原理	Paul Grice,
	発話行為論 Speech Act Theory	ある行動遂行のための発話の用いられ方や機能を探索する。	話者の意図 発話内行為	John Austin, John Searle
	選択体系機能言語学 Systemic Functional Linguistics	社会・文化的側面を投影した談話構造を機能面から解釈する。	レジスター 言語のメタ機能 ジャンル	Michael Halliday, Ruqaiya Hasan, James Martin
	教室談話分析 （パーミンガム学派）	会話を高度に組織化された言語体系として記述する。	IRF 構造 発話機能	John Sinclair, Malcolm Coulthard

2. 医療者教育研究における談話分析 (マクロレベル)

批判的談話分析は、言語を社会的実践として捉え、社会における権力関係やイデオロギー、社会的不平などの諸問題について言語分析を通して明らかにするマクロな視点からの談話分析アプローチである。したがって、批判的談話分析では、社会の文化的、政治的、組織的な観点から、特定の会話や文書作成などの言語活動が起こる背景を探索することを主な目的としている (Fairclough, 1989; Foucault, 1972; van Dijk, 2001)。

医療者教育研究で採用された談話分析アプローチの中で、近年この批判的談話分析が主要な研究方法論として主に採用されている。例えば、多職種連携協働とその教育システムの社会的位置づけ (Haddara & Lingard, 2013) や組織の認識 (Martimianakis et al., 2020)、認証評価における項目設定の社会的背景 (Whitehead et al., 2014; Chen, Kuper & Whitehead, 2021) などが含まれる。このアプローチは、社会における権力関係を明らかにしたり、社会的な構成要素として重要な談話の特徴づけたりするために、文書やインタビューデータの分析が主となる。

Chen ら (2021) は、1957 年以降、北米の卒前医学教育評価基準 (Undergraduate Medical Education Accreditation Standards) の中で Compassionate Care (思いやりのあるケア) という言葉がどのように、またどの程度組み込まれているのかを批判的談話分析を用いて分析した。その結果、権威ある文書である Accreditation Standards の中では、「Compassionate care」に関連する内容は散見されるものの、その言葉自体はほとんど記載されていないことを示した。社会的背景として、Compassionate care の概念・定義は、職種間や医師-患者・家族間でも明確になっていないことや、コンピテンシー基盤型教育が推進される中、Compassionate care の実践に必要なコンピテンシーが具体的に定められてない現状、そして、近年記載がみられる Cultural competencies や Cultural humility、Critical consciousness といった言葉に、Compassionate care の概念が含まれている可能性があることを考察している。このように、批判的談話分析では、言語活動の分析を通じて、権力やイデオロギー、階層などの観点から、その社会的背景を「批判的に」に理解することに主眼を置いている。

3. 医療者教育研究における談話分析 (メゾレベル)

「文脈」は、談話実践の分析においてカギとなる概念である。このメゾレベルでは、特定の文脈の中での言語使用とその意図に焦点が置かれる。例えば、「コミュニケーションの民族誌 (Ethnography of communication)」では、スピーチイベントが談話分析の主要な単位となり、そのイベントの構成要素を SPEAKING という頭字語で表現している (Hymes, 1974)。具体的に、それは、Setting (設定) の S, Participant (参加者) の P, Ends (目的) の E, Act sequence (行為の順序) の A, Key (表現の特徴) の K, Instrumentalities (媒体) の I, Norms of interaction (相互行為の規範) の N, Genre (ジャンル) の G を意味する。

同様に、言語学や人類学、社会学で発展してきた「相互行為の社会言語学 (Interactional sociolinguistics)」において、談話の解釈での文脈の重要性が強調されている。例えば、Goffman (1974) が提唱したフレームは、当事者が「ある状況下で自分たちが何を行っているのか」を特定する際の各々の認識や期待の枠組みを明らかにしようとした。ゆえに、フレーム分析は、ある文脈において異なる考えや期待の枠組みを有する人々の参加プロセスや事象を探索する際に有用なアプローチとなる。Gumperz (1982) は、相互行為の概念として、メタメッセージ、コンテクスト化の合図、フッティング、フレームを同定していることから、文脈がフレーム分析において重要な概念であることがわかる (表 2)。

表 2：相互行為における概念 (Goffman, 1974; Gumperz, 1982)		例
メタメッセージ	言葉そのものの情報ではなく、言語・非言語の文脈上の社会的意味	この部屋暑いですね (事実の伝達? 窓を開けてほしい?)
コンテクスト化の合図 (contextualization cues)	ある文脈を理解するための言語的・非言語的の手がかり (例: リズム、声の大きさ、イントネーション、ジェスチャー、表情等)	外を眺める。 (窓を開けてほしうだな)
フッティング	コミュニケーションにおける自分と相手との関係づけ、距離感や立ち位置	相手は訪問者で、こちらは家主 (訪問者が勝手に他人の部屋の窓は開けられないだろう)
フレーム	メタメッセージや場面の手がかりの作用による参加者同士の文脈上の「期待」「認識」	私に窓を開けてほしいと相手は期待している。⇒「依頼」で認識共有

例えば、Sundberg ら (2019) は、フレーム分析を用いて、教育主任者の認識と教育ポリシーを記載した組織の公式文書とを比較することで、多職種連携教育の意義を探索し、多職種連携教育の定義や意義に関して教育者と文書間で大きなギャップがあることを明らかにした。そのギャップは、多職種連携教育を実施する上で大きな壁になりうることを示唆している。その他のメゾレベルの談話分析には、言語学的観点から目的を達成するための話者の言動と意図に焦点を置いた発話行為論 (Speech act theory) (Austin, 1962) や語用論 (Pragmatics) (Grice, 1989) といったアプローチも含まれる。

4. 医療者教育研究における談話分析 (ミクロレベル)

ミクロレベルの談話分析は、ある特定のコミュニケーションの文脈においてどのようにテキストが言語学的・機能的に体系づけられているかを探索する。教育談話分析や選択体系機能言語学が主要なミクロレベルの談話アプローチであり、話し言葉だけでなく書き言葉の構造や機能を社会的文脈と関連づけながら記述することが目的となる。談話構造に関しては、バーミングハム学派の研究者が教育現場での談話単位を系統的に整理した (Sinclair & Coulthard, 1975)。談話単位の大いものから順に、授業などのイベントを Lesson とし、その Lesson の中で設計された活動を Transaction、その活動の中でのやりとりを Exchange、そのやりとりの中での機能を持った発話を Move、最後に、その Move の中の最小機能を Act と定義した。教室談話分析は、Initiation, Response, Feedback/Follow-up の3種類の Move で構成される Exchange を会話の基本構造と位置づけ、「教室」という文脈の中での言語行動とやりとりのパターンを詳細に記述することを目的とする (Tsui, 1995)。例えば、教室での典型的な談話パターンは、教師が質問 (Initiation) をし、その質問に対して生徒が答え (Response)、その答えに対するフィードバック (Feedback) を教師が行うと考えられる。この典型的なパターンを IRF シーケンスという。

選択体系機能言語学は言語を複数の機能・意味を同時に有するリソースと考える。これまで言語学においては、一つの文章や語彙には一つの意味・機能しか有さないという考えが一般的であったが、Halliday (1978) は、あるコンテキストの中で使われる一つの言語 (テキスト) には、複数の意味を有し、それらは複合的に機能すると考えた。このアプローチでは、話し手や書き手が選択した言語が意味を構築するためにどのように機能しているかを探索することに役立つ。具体的に、Halliday は、下記の3つの言語のメタ機能を分類した。

1) 観念構成的機能 (何を):

伝えたい内容・事象をどう表現するか…語彙、能動態 vs 受動態、自動詞 vs 他動詞、たぶん、きっと、絶対、～べきだ等の話者の心的態度表現

2) 対人的機能 (誰に対して):

尊敬・謙譲・丁寧語といった待遇表現とそれに関わる語彙・人称

3) テキスト構成的機能 (どのように):

話す、文章を書く、図示する、絵を書く、映像を見せるなどの媒体や内容の論理性 (接続詞、話の全体的な構成、指示語、主語の省略など) が関わる。

教室談話分析と選択体系機能言語学を枠組みとして、Imafuku ら (2014) は、異なる専門の医療系学生が共にグループ学習 (Problem-Based Learning) に取り組む際のインタラクションを詳細に分析した (表 3)。実際の会話データを Move ごとに機能分類することで、会話を高度に組織化された言語体系として記述している。表 3 は、薬学生のメンバーが対話を通じてどのように知識を構築していたかを示している。このように、詳細な談話分析の結果に基づいて、今後の学習者の取り組み方や教員のファシリテートの仕方など具体的な教育的示唆を提供することが可能になる。

表 3: PBL での知識構築過程 (Imafuku et al., 2014)

1	薬1	なんか若干ちがったよね (.) 代替案 (.) ((薬2を見る)) と思って (.)	† I: Statement
2	薬2	=うん (.) たしかに=((うなずく))	Res: Register
3	薬1	=なんか(.)その違いは= 私はシェーングレンをからめて考えるのを忘れてしまっていて	(Continue)
4	薬2	それはわたしも考えるのを忘れてたけど (.)	F: Acknowledge
5		メトトレキサートからレフルノミドって (.)レフルノミドってどういう系統の薬でしたっけ?	I: Elicitation
6	薬1	えっと::種類(.)系統は一緒に (.) ((資料参照)) えっとね:::(.) 抗リウマチ薬ってやつだ (.)疾患修飾性抗リウマチ薬のなかに入ってるやつで(.)一応推奨度は A で(.)メトトレキサートが効かなくなった場合の代替薬としては挙げられているかんじかな	Res: Answer
7	薬2	たぶんおなじのを参考資料で使ってると思うんだけど (0.5)	F: Acknowledge
8		これはどうなんだろう(.) 生物学的製剤 (2.0)その併用っていうのは考えられるのか、これ単独で使うのか(.)それとも生物学的製剤を併用するのか(0.4)それともあっちを	I: Elicitation

		単独で使うのかっていうのが	
9	薬 1	そうだね (.) よくわからないね	Res: Withhold
10	薬 2	だからこれも調べた方がよさそう (.)	F: Acknowledge
11	医	今の話 (.) もう一回話してもらえる？	I: Command
12	薬 1	あ (.) そうだね (.) えっと:::	Res: Comply

†I-Initiation, Res-Response, F-Follow-up move

医療者教育学研究においては、ミクロレベルの談話分析を採用した研究は、近年増えてきているものの、依然として限られている。その中で、複数人が参加する学習場面では、PBL (Imafuku, 2007; Woodward-Kron & Remedios, 2007)、Case-based learning (Nunohara et al., 2020)、グループでの振り返りセッション (Veen & de la Croix, 2017) など、また、1対1の対人コミュニケーション場面においては、OSCE といった模擬患者と医学生間の会話 (Gormley et al., 2021) や臨床教育でのフィードバック場面 (Duitsman et al., 2019) などの研究が実施されている。

5. 談話分析の可能性

談話分析は、「言語」というレンズを通して、社会構造や文化(マクロレベル)、当事者の背景・思考・言語行動の意図(メゾレベル)、実際の言語パターンや発話機能(ミクロレベル)を記述・分析するためのアプローチである。現在の医療者教育研究においては、批判的談話分析に代表されるマクロレベルのアプローチが多く採用されている。一方で、学習者間や教育者-学習者間の対話を基盤とする社会構成主義的な教育観が主流である現代の医療者教育において、メゾレベルやミクロレベルでのインタラクションの詳細な分析が今後さらに必要になる。しかしながら、談話分析を実施することに難しさを感じる医療者教育者は多くいるかもしれない。今後は、Woodward-Kron ら (2011) が実践しているように、社会学者や応用言語学者など談話分析の経験者と医療者の教育・研究の学際的連携をさらに進めていくことが重要になるだろう。

謝辞

本稿の内容に関してご助言いただいた The University of Melbourne の Robyn Woodward-Kron 教授に深謝いたします。

研究資金

本論文は、JSPS 科研費 20K10374 の助成を受けた研究成果の内容を含む。

利益相反自己申告

本論文に関して、申告すべき利益相反はない。

引用文献

- Austin JL. (1962). How to do things with words. Oxford: Clarendon.
- Chen AY, Kuper A and Whitehead CR. (2021). Competent to provide compassionate care? A critical discourse analysis of accreditation standards. Medical Education, 55, 530-540.
- Duitsman ME, van Braak M, Stommel W, Ten Kate-Booij M, de Graaf J, Fluit CRMG and Jaarsma DADC. (2019). Using conversation analysis to explore feedback on resident performance. Advances in Health Sciences Education, 24, 577-594.
- Fairclough N. (1989). Language and power. London: Longman.
- Foucault M. (1972). The archaeology of knowledge: and the discourse on language. New York: Vintage Books.
- Gee, J. P. (1990). Social linguistics and literacies: Ideology in discourses. London: Falmer Press.
- Goffman, E. (1974) Frame analysis: An essay on the organization of experience. Northeastern University Press.
- Gormley GJ, Johnston JL, Cullen KM & Corrigan M. (2021). Scenes, symbols and social roles: raising the curtain on OSCE performances. Perspectives on Medical Education, 10, 14-22.
- Grice, H. P. (1989). Studies in the way of words. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Gumperz, J. (1982). Discourse Strategies. Cambridge University Press
- Haddara W & Lingard L. (2013). Are we all on the same page? A discourse analysis of interprofessional collaboration. Academic

- Medicine, 88, 1509-1515.
- Halliday MAK. (1978). *Language as a social semiotic: the social interpretation of language and meaning*. London: Edward Arnold.
- Hymes D. (1974). *Foundations in sociolinguistics: an ethnographic approach*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Imafuku R. (2007). A case study of a medical PBL tutorial. In H. Marriott, T. Moore, R. Spence-Brown (Eds.), *Learning discourses and the discourse of learning* (pp. 11.1-11.17). Melbourne: Monash University ePress.
- Imafuku R, Kataoka R, Mayahara M, Suzuki H & Saiki T. (2014). Students' experiences in interdisciplinary problem-based learning: a discourse analysis of group interaction. *Interdisciplinary Journal of Problem-based Learning*, 8 (2), 1-18. <http://dx.doi.org/10.7771/1541-5015.1388>.
- Imafuku, R., Saiki, T., & Woodward-Kron, R. (2022). Revisiting discourse analysis in medical education research. *International Journal of Medical Education*, 13, 138-142.
- Martimianakis MAT, Fernando O, Schneider R, Tse S & Mylopoulos M. (2020). "It's Not Just About Getting Along": Exploring Learning Through the Discourse and Practice of Interprofessional Collaboration. *Academic Medicine*, 95: 73-80.
- Nunohara K, Imafuku R, Saiki T, Bridges SM, Kawakami C, Tsunekawa K, Niwa M, Fujisaki K & Suzuki Y. (2020). How does video case-based learning influence clinical decision-making by midwifery students? An exploratory study. *BMC Medical Education*, 20: 67.
- Searle JR. (1969). *Speech acts*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sinclair J & Coulthard M. (1975). *Towards an analysis of discourse*. Oxford: Oxford University Press.
- Sundberg K, Reeves S, Josephson A & Nordquist J. (2019). Framing IPE. Exploring meanings of interprofessional education within an academic health professions institution. *Journal of Interprofessional Care*, 33: 628-635.
- Tsui ABM. (1994). *English conversation*. Oxford: Oxford University Press.
- van Dijk TA. (2001). Critical discourse analysis. In D. Schiffrin, D. Tannen, H. Hamilton (Eds.), *The handbook of discourse analysis*. Oxford: Blackwell Publishers Ltd.
- Veen M & de la Croix A. (2017). The swamplands of reflection: using conversation analysis to reveal the architecture of group reflection sessions. *Medical Education*, 51, 324-336.
- Whitehead C, Kuper A, Freeman R, Grundland B & Webster F. (2014). Compassionate care? A critical discourse analysis of accreditation standards. *Medical Education*, 48, 632-643.
- Woodward-Kron R & Remedios L. (2007). Classroom discourse in problem-based learning classrooms in the health sciences. *The Australian Review of Applied Linguistics*, 30: 9.1-9.18.
- Woodward-Kron R, Stevens M & Flynn E. (2011). The medical educator, the discourse analyst, and the phonetician: a collaborative feedback methodology for clinical communication. *Academic Medicine*, 86: 565-570.

*責任著者 Corresponding author : 今福輪太郎 (e-mail: rimafuku@gifu-u.ac.jp)